

＜個人覚え書き＞ロシア極東への旅—2019年7月4日～7月8日—  
牧野行雄



ロシア沿海州を中心とする地図（世界大地図帳、平凡社、1984年より）。

（注）ロシアはソビエト連邦と表記されている。ウラジオストクはピョートル大帝湾に突き出た半島の突端にあり、アルセニエフはそこから北東へ160キロメートル離れた内陸にある。

### はじめに

十年以上前から、四谷のフランス料理店、および後に、イタリア料理店で、かつて気象大学の数学教師だった能美武功（のうみたけのり）先生、坪井道雄先生（\*）と定期的に会食し歓談を楽しんだ。今年（2019年）3月はじめにも、能美先生と会った。その時に「ウラジオストクはロシア語でヴラジ（支配する）とボストク（東方）の合成語で“東方を支配せよ”という意味」だと教えられた。\*坪井先生は館林の浄土宗大道寺住職を務められ、能美先生の行列式についての論文共著者でもあった。

能美先生は、大学で数学とロシア語・フランス語を教え、気象研究所では私の上司の部長を務められた。英・仏・露の多くの戯曲を翻訳し、インターネット上に公開されていた。大学では将棋同好会をつくり、同僚や教え子と研鑽、楽しまれた。一方、水

鷗流居合術も修行された。聞くところによれば、戦後、大連から引き上げ、仏文の学生時代には、当時の日本人の生活に取材したフランスのドキュメンタリ映画製作チームの通訳をされ、商社に就職後はロシア語を習得、さらにもう一度数学科へ再入学するという異色の経歴を持たれる。

研究所の部長の頃は、外国の研究者とも親しく交流され、私たちには強力なホスト役を果たされた。退職後も、変わらず親しくしていただき、おかげで私は偏りがちな興味や考え方のバランスを保つことができた。今回の旅のこともぜひ報告したいと思っていたが、7月19日に急逝され叶わなかった。おそらく、文章のおかしな点も指摘していただけたことと思う。感謝と哀悼の意をもってこの報告を綴る。

## 旅の契機

「東京山手線一周ウォーキング」で、小林昌仁さんからウラジオストクへ行かないかと誘われた。小林さんは日本市民スポーツ連盟の顧問で、“21世紀の朝鮮通信使日韓友情ウォーク”を遠藤靖夫さんや中村進さんらと推進され、初回～第三次の代表を務められた。85歳ということだが70代、いや60代の若さと元気をお持ちだ。「ウラジオストク国際ウォーキング大会」への参加とあわせ、1970年代に黒澤明監督が作った映画「デルス・ウザラ」のロケ地を訪ねようとのことだった。元は演劇界におられたと聞き、合点がいった。

4年前、私が初めて“21世紀朝鮮通信使”に参加した際、馬山（マサン：現在は韓国慶尚南道・昌原チャンウォン市馬山区）を訪れた。馬山は、祖父・謙吉が昭和六年（1931年）退職するまで務めた旧朝鮮殖産銀行の支店があり、母が高等女学校時代まで過ごした町だった。その際、遠藤さんから紹介された馬山・慶南大学の孫明坤（ソンミョンゴン）先生（当時日本語科の教授）に大変お世話になった。孫先生は東京大学でロシア語を学ばれたという。今回のウラジオストクの大会では、日・韓・露の各参加者の結節点の役割を果たされていた。その孫先生から誘われていたことも、このたびの動機の一つだった。

### 一日目（7月4日）

昼過ぎ、成田空港第二ターミナルで旅行会社の担当者に会い、小林さんらが待つスペースへ案内された。ツアー参加者は、小林さんのほかに市民スポーツ連盟の会長の川内基裕さんと理事の藤本隆さん、一般から檜山靖子、飯田静江、原武一博の各氏、“21世紀朝鮮通信使友情ウォークの会”から、中村進、遠藤靖夫、吉川達也、小林克一の各氏、それに私とあわせて総勢11名だった。

シベリア航空（S7）6282便は、搭乗後50分ほど待機して16:30ごろ離陸した。以前はプロペラ機が使われたらしいが、今はエアバス社の新品の機体（A320

Neo)だった。地図で見ると分かるが、ウラジオストクは成田から北海道くらいの距離で意外に近い。約1時間半飛行して19:05（日本時間では18:05。ウラジオストクは東京より西にあるが1時間早い標準時を採用している）に着陸した。機内では藤本さんの隣席で、いろいろお話しを伺った。藤本さんは船舶関連の仕事をされていたそう。気象庁にも、今は退職されているが共通の知人がいた。

空港近くで食事をして、20人乗りくらいの小型バス（トヨタの右ハンドル車）で高速道路を北へ向かう。空港近くは霧のため視界が悪かった。かなり走って、東へ進路を変え、アルセニエフ市のホテル「タヨージナヤ（密林の意味）」へ到着したのは午前2時ごろになっていた。途中、真っ暗闇の道路を野生のシカ1頭が横切った。満天の星空には銀河が明るく輝いていた。

故黒澤明監督が映画のロケ中に逗留したというホテルは素晴らしいホテルだった。相部屋になった遠藤さんが、嘆息しつつ「朝鮮通信使のビジネスホテルとは雲泥の差だなあ」と叫ぶ。まさに同感で、ここは寝室のほかリビングルームも付いている。

## 二日目（7月5日、金曜日）

ホテルの建物続きのカフェテリアで朝食をすませ、みんなで監督ゆかりの部屋を見学する。他の部屋もみな立派な五つ星クラスかと思われた。今回、インターネット対応のAI翻訳機「ポケトーク」をレンタルで借りていた。使い方に慣れるまで大変そうだったが、フロントの女性との会話は成立した。“ドーブラエ・ウートウラ”（「おはようございます」という意味）。仲間内では格好の玩具となる。

ガイドはロマン・イヤレチュンコ氏。46歳の感じの良い男性で、日本語がとても流暢だった。午前のウォーキングは、前夜が遅かったので、ウヴァリナヤ丘まで先にバスで行き、そこから市内へ下るよう予定を変更、みんなも、一も二もなく賛成した。

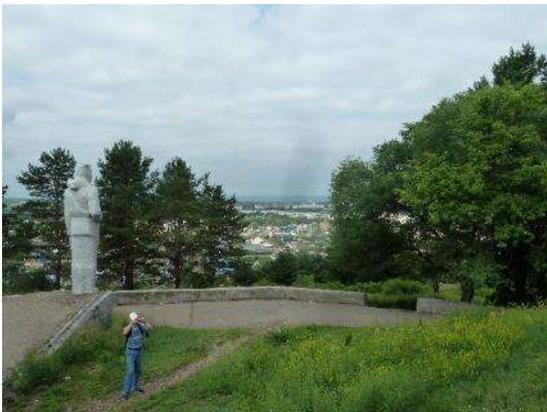


故黒澤監督が宿泊した部屋を見学。（左写真）ロマン氏、原武、吉川、遠藤の各氏。



ウヴァリナヤ丘のアルセニエフ像（左）とデルス・ウザラのモニュメント（右）。

丘を下る途中、アルセニエフの町や沿海州の山野が遠くまで見渡せた。アルセニエフ市はこのあたりの中心都市で、人口 6 万人ほどの小さな町だが旧ソ連時代から軍需産業、特にヘリコプター生産が有名だったらしい。道ばたの草花は日本国内のものともあまり変わらない。おそらく北海道と似たようなものだろう。



丘からは市内が遠くに見える。



道ばたのイネ科の雑草。

丘を下ると市内の広い道路に続く。通行の車両は少なく、周囲も静かだ。しばらく歩くと、市中心部に近づくが、やはり閑散として、空が広く開けた感じだ。丸い屋根のロシア正教会の立派な建物がある。その庭には水くみ場があり、猫がのんびりした様子で水を汲みに来た人々とくつろいでいた。誰もいない教会の中にはいり、祭壇やイコン（聖画）などを拝観させていただく。



丸屋根のロシア正教会の建物。



水くみ場の婦人とネコ。



アルセニエフ町中を歩く



歩道も広い。後ろ姿は吉川さん。

極東ロシア沿海州の雰囲気は、人々の肌や眼、髪の色そして町のたたずまいからも、やはり欧州文化圏という印象が感じられる。まっすぐな道が走り、大きく区画がとられている。デパートやショッピングストアの中をのぞいて、休憩しながら歩く。

市中心部付近に文化センターがあり、市の重要産業である軍事ヘリコプターの製品が野外展示されている。攻撃用ヘリコプターでロケット砲や自動機銃などの武器が装着されている。ベトナム戦争を思い出した。その設計は人を攻撃する意図を表現したもので、不気味さを感じる。その公園には黒澤明監督の記念碑もあり、その対比に何か違和感を覚える。そこからさらに数百メートルほどの突き当たりにヘリコプターの会社“プログレス”の広々とした前庭があった。そこには別の二重ローターのヘリコプターが展示され、左手に記念塔がある。キリル文字と“1941-1944”の数字が刻まれていた。多分、第二次大戦の「大祖国戦争（独ソ戦）勝利」を祝うものだろう。

記念塔の両脇には、戦闘中の倒れる兵士の姿や工場の勤労働員に励む婦人や市民、労働者の姿を描いたレリーフがあり、文字が分からなくても描かれた内容はよく理解できる。



攻撃用ヘリコプターの屋外展示。



大祖国戦争（独ソ戦）戦勝記念碑。

ロマン氏はレストランと交渉して、予約時間を早めて昼食を摂ることができた。コース料理は、実は18世紀のロシアが発祥で、貴族のために料理が冷めないうように工夫された。それがのちにフランスに伝わったものだという（NHKテキスト“まいにちロシア語”11月号、p29による）。前菜のサラダのあとスープ、メインディッシュ、デザート等の順だが、サラダだけでもかなりの分量である。この時のスープはボルシチ、メインはペリメニ（ロシア風餃子）、デザートはクレープとコーヒー。全員、恒例のビールを注文した。ただし、あまり飲めない私はみんなの半分で十分楽しめた。

13時にはレストランを出て、ゴーリキー像のあるロータリーを右折（時計回りに4分の3周）して、ウラジオストクへと向かう。昨夜は暗くて見えなかった沿海州の広々とした自然の中を走る。が、すぐ眠くなる。



アルセニエフ市のロータリーのゴーリキー像。



レストランをでたところ。

遙かに続く草原の景色を見ながら、眠気覚ましにロマンさんに色々質問が出て、現地に関する予備知識を補う。さすがに遠藤さんは元記者で話の引き出し方がうまい。すると逆に、ロマンさんの友人であるバスの運転手から、どこの車がよいかと質問が出た。小林克一さんは元商社の執行役員を務めた人で、トヨタ車を売った。そのため、まず車の整備工場をネットワーク化し、品質を保証して売り込みに成功したそうだ。今の現地法人会社の社長は当時の部下という。

大草原が山の麓まで広がる。しかし、この光景は比較的新しいはずである。沿海州がロシア領となったのは、明治維新直前の1860年に清と帝政ロシアが北京条約を結んで以降だからだ。帝政ロシアの陸軍中佐だったウラジミール・アルセニエフが沿海州の調査に入ったのは、20世紀初頭の日露戦争前後(1902~1907年、明治36~41年)だ。さらにその10年ほど前、日清戦争の頃にイザベラ・バード(結婚してビショップと改名)はウラジオストクを訪れ、町の様子や人々の生活を報告している。わずか150年くらい前に、ウクライナなどロシア各地や清、李朝朝鮮などから人々が移住し、密林が開かれたのだ(参考:ウラジミール・アルセニエフ「デルス・ウザラ」、安岡治子訳、小学館、2001。イザベラ・バード「朝鮮紀行—英国婦人の見た李朝末期」、時岡敬子訳、講談社学術文庫、1998)。



大草原の景色を見ながらウラジオストクへ。 車窓のウスリー湾と小林克一さん(右側)。

黒澤明監督の映画で描かれた先住民の猟師デルス・ウザラは、密林の中で五感をフルに研ぎ澄まし、雲の流れや鳥の動きから天候の急変を察知し、足跡や臭いからどんな人種や動物が何時間前に通ったかを言いあて、アルセニエフや部下たちを驚かせる。狩猟民として生活するデルスが、視力の衰えから老いを自覚し、勧められてハバロフスクのアルセニエフの家で暮らす。しかし、自然の森の中と違い、清潔だが無機的な白い壁に囲まれた部屋の中の生活に鬱屈し、気晴らしに銃を撃ちに外に出ようとするも、街中での発砲は禁じられている。

最終的に家を出て生活していたデルスは、ある時、公園で持っていた最新式の

銃を盗もうとする者に襲われ死亡する。人間の“最終的な自然である”死さえも人工化された現代社会のあり方、窮屈さを考えさせる作品である（黒澤明「デルス・ウザラ」、DVD版、オデッサ・エンタテインメント、1975。山田季広、NIPPON映画の旅人「密林の人に魅せられて」、朝日新聞2014年4月12日記事ほかを参考。新聞記事は小林さんがコピーして配布してくれた）。

私は20代の頃、この映画を見たが、ただ退屈しただけで、黒澤が言いたかったことは理解していなかったようだ。今回、初対面でいきなり同世代の原武さんが全く同じ感想を述べたので、大いに共感した。年を経ることの意義を感じる。

車はウスリー湾に沿って進んでいた。ウラジオストク市街に入ると、反対車線は週末を郊外（おそらく個人別荘のダーチャ）で過ごす車があふれ渋滞していた。宿泊のホテル「ヴェルサイユ」は町の中心部にあった。



左側がホテル・ヴェルサイユの入り口



ホテルのホールでくつろぐ一行



夕食は地下のビートルズ趣味のレストラン

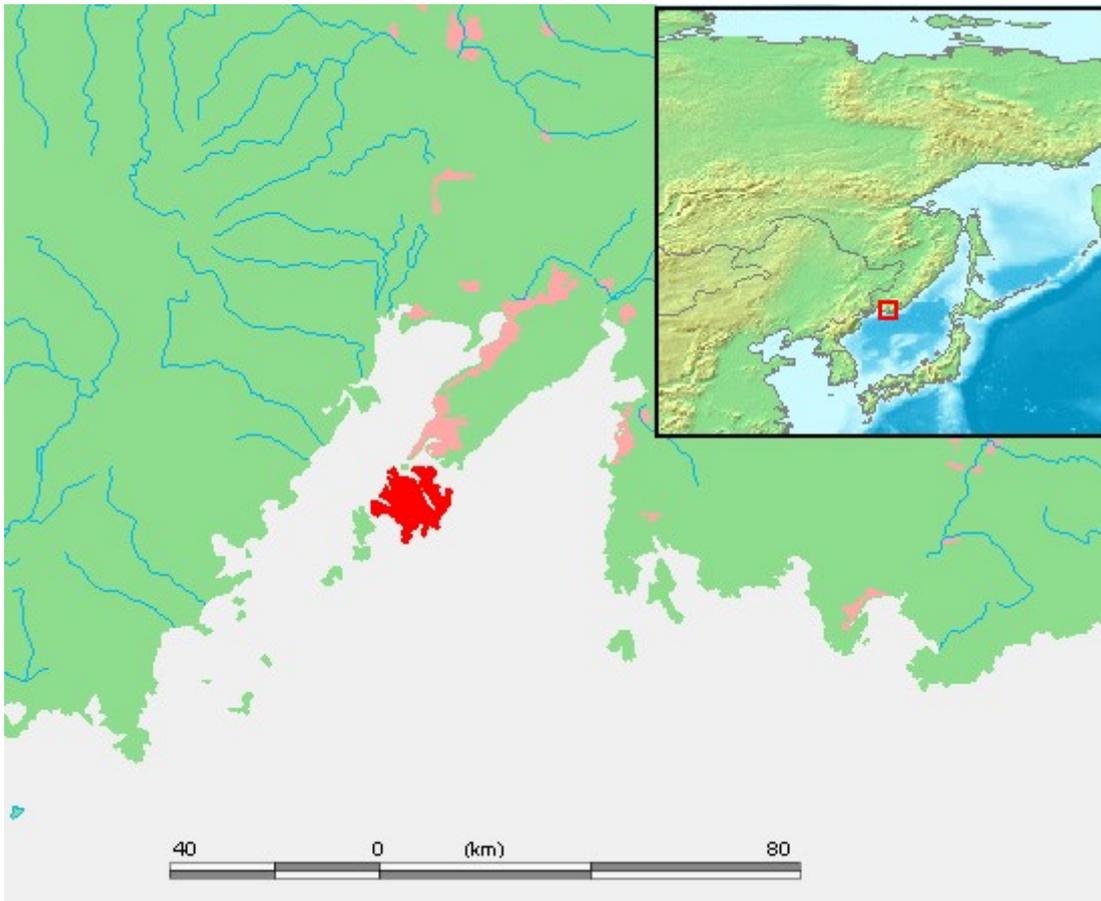


夕食のメインディッシュ

夕食は、ホテルから5分くらい歩いたところの建物の地下のレストランでとった。1980年代風に旧ソ連時代の“あこがれの西側文化”の象徴であるビートルズの写真やレコードジャケットで飾られていたのが印象的だった。食事分量が適当で美味しかった。ビールも種類が豊富だった。

### 三日目（7月6日、土曜日）

ウラジオストクは人口約60万人でハバロフスクと並ぶロシア極東の中心都市である。沿海州の南端の湾にあり、日本海に突き出たムラヴィヨフ・アムールスキー半島にある。プーチン大統領が2012年のAPECアジア太平洋経済協力や2015年の東方経済フォーラムの開催にあわせて大規模なインフラ投資を指示し、急速に活性化したという。



中央の**赤色部**がルースキー島、その対岸の**ピンク色部分**がウラジオストク市街(Wikipediaより複製)。ウォーキング大会で歩いたのは、赤色のルースキー島の南東（右下）側（大会二日目）と、対岸の半島突端部とΓ字に入り組んだ金角湾を巡る部分（大会一日目）



大会一日目のコース。スタートは半島付け根左側の“СТАРТ”。反時計回りに半島をまわり、金角湾沿いに東行(地図では右へ)、丘を(北へ)登り、鷲の巣 (Orlinae Cопka アルリーナエ・ソプカ) 展望台へ。西へ降り、スタート地点へゴール。スタンプはチェックポイントの通過証明。

スボルチーヴナヤ海岸通りの広場に“国際ウォーキング”の受付が設けられた。ホテルで簡単な朝食を食べ、そのまま海岸通りに降りて行く。前の日、夕食後に遠藤さんと腹ごなしに散歩した時、夜店が恋人や家族連れ、観光客で賑わっていた。その先の広場がスタート地点で、参加登録をして記念品を受け取る。地図に表示のスタート地点よりも少し先へ進んだ所に広場があった。

このイベントの会長のウラジミール (Dr. Vladimir Menovshichikov メナフシチコフ) が我々を見つけ、近づいてきた。“21世紀朝鮮通信使友情ウォーク”で大阪から東京まで一緒に歩いた仲だ。再会を喜び合った。現役時代は海洋学の研究者だったと言うので私とは話が合った。おとなしい人で、ウラジオストクのウォーキングの会の運営は、事務局の元気な女性が切り盛りしているとのことだ。



左から私とウラジミール、小林、遠藤さん。



開会式・壇上右からウラジミール、孫明坤さん



民族衣装の女性たちと朴海龍さん



いよいよウォーキングに出発

民族衣装の女性の舞踊のあと、ロシア、韓国、日本、台湾の各グループの代表が紹介され、女性インストラクターによる軽やかなエアロビクスの準備運動のあとスタートした。日本からは我々11人のほかに埼玉県グループ（“通信使ウォーク”で旧知の大野さん、塩沢さんらが世話役）が20人ほど参加している。韓国からは孫さん夫妻のほか通信使仲間の宣相圭（ソンサンギョ）、洪淳彦（ファンソン）、朴海龍（パクヘヨン）、朴泰洙（パクテス）の各氏など数十人、台湾からも10人程度で、台湾一周の旅でお世話になった中華山岳会々長・黄榎楠（ファンパンナン）氏の子息や李麗錦（リルーチン）女史、謝維忠（シェウエイチョン）氏らのなじみの顔が見える。旧知の人々との再会はお互い、安心するうれしいものだ。

ロシアの参加者は小学生や若者そして女性が多い。金髪や白い肌がよく似合う明るい色の服装が多く、華やかな雰囲気だ。坂を上り、途中、14kmコースと分かれる。岬の突端で海辺に降りて、浅瀬を渡り灯台（標識の鉄塔）まで行く。ウォーキングの途中で、撮影担当の若い女性や日本語の勉強をしている中高生くらいの子（ロシアでは小学生から英語のほかの外国語を学習している）などと会話が弾んだ。わが老人たちは、若者たちと話すことがうれしい。遠藤さんは、極東連邦大

学に語学留学中という日本人主婦の女性をみつけ、色々“取材”している。



左から中村、原武、カメラウーマン、遠藤、小林、藤本、孫さん。 小林克一さんと日本語勉強中の少女。

海軍施設の近くに、嘉納治五郎と彼から柔道を学んだワシリー・オシェブコフ (1893-1938, Wikipedia 調べ) の像があった。そういえば、プーチンさんも柔道を愛好していた。旧ソ連時代から 1992 年まで、ウラジオストクは軍港として厳重に閉鎖されていた。ケーブルカーで「鷲の巣展望台」に登る。眼下には金角湾があり、ルースキー島へとつながる現代的な黄金橋が一望される。この地区はロシア太平洋艦隊本部のある軍港で、橋は APEC 開催を機にプーチン大統領の指示で建設されたものという。

展望台で北京から来たという親子と会う。女の子は「ハン・チン」と言った。とっさに意味が分からなかったが、母親が“很近”すなわち親しい関係“朋友”だと漢字で教えてくれた。中国からも観光客が多数来ているようだ。



上の方の階に旧日本領事館があったという建物。



シベリア鉄道の起点となる駅構内。

展望台から降りると半島を一周したことになり、下りていくと市の中心部を抜けてスタート地点に戻り、私の参加した 20km グループのウォークが終わった。14km ウォーキングに参加した軍の部隊が先に帰り、食料タンク車からおかゆの

ようなものをサービスしてくれた。

いったんホテルに帰り、シャワーを浴びて、夕方からの懇親会に参加するため、皆で会場のホテルへ出かけた。



嘉納治五郎から黒帯が授与されている像。



鷺の巣展望台から金角湾を望む。



軍のタンク車からおかゆが供される。



懇親会で遠藤、洪、小林、ウラジミール、ロマン、藤本の各氏。

四日目 (7月7日、日曜日)



大会二日目 (ルースキー島) のコース説明とチェックポイントの通過証明スタンプ。スタート(СТАРТ)から左下の岬の突端を折り返して、再びスタート地点を過ぎて北上し、ゴールは水族館(Okeanarium 右上)

朝 7 時半にホテルからバスで出発し、金角湾の黄金橋を渡り、ルースキー島の出発地点へ向かう。大会二日目の上空は霧が晴れて晴天となった。日本では梅雨前線が北上しているシーズンで、ここでもずっと曇っていたようで、晴れは珍しいという。

前日は懇親会であまり食べなかった上に、遠藤さんと吉川・小林さんの部屋へ行き、おしゃべりに付き合い二日酔い気味。ウォッカは後に残らないからと言いつつ、結局、24時に寝たので睡眠不足でもある。体調はよくない。

スタート地点 (СТАРТ: キリル文字の C は英語の S、P は英語の R の発音) はルースキー島の南東端中央で、コンクリートやアスファルト舗装もなく土の広場だ。歩き始めると、前日の市街地とは違って、腰まである草の間の道を歩く。霧の中を進んでいると、霧が晴れて、すぐ左手の下は断崖絶壁だった。幻想的な景色をみながら歩くうち、体も温まってきて二日酔いの体調もなんとかよくなる。



ルースキー島からの出発前の記念写真。



霧の中絶壁の上を進んでいる。



絶壁の上の花を撮影。



小さな男の子とお母さん。



トレッキングコースの花々

小さな子供がいたので、ポケトークで年齢を尋ねたら、11歳と6歳の兄妹だという。簡単な言葉なら通じる。特に子供の声はキャッチしやすいようだ。海岸へ降りたところで昼食休みになった。ロープのある崖へ行くまでは足下が不安定で、前回来たことのある原武さんは自重するという。私は突端まで行ってみたいので、こわごわと慎重に岩場を渡り、ロープをたどって登って行く。途中で、川

内さんとすれ違う。すでに岬まで行き、元気に帰ってこられるところだった。道から離れた茂みでは、婦人たちが”花摘み“をしているようだった。私が岬の突端の灯台の下まで行き戻った時には、昼の弁当時間が終わっていた。朝から食欲がなかったので、絶食がちょうど良かった。スタート付近にあるトイレはあまりきれいではなかった。自然の中での”用足し“は正解かもしれない。



(左写真)絶壁の上には後続ウォーカーたち。  
海にはボート遊びの人たちがいる。



(右写真)昼食中の岩場を離れ、手前へ渡り、  
崖を登り半島の突端の岬へ向かった。

朝来た道を引き返し、スタート地点をとおり過ぎて北上する。道は山の中で舗装はなく、深くくぼんだ車の轍(わだち)には水たまりがあり、非常に歩きにくかった。海岸へ出る地点の標識も分かりづらく、年配の男性の指示がなければ、そのまま車道へ出そうだった(コース説明図のKP-2あたり)。



人なつっこい少年と知り合いになった。11歳という。



エレーナさんが一緒に歩いてくれた。

海岸の道はさらに大変だった。スイカかソフトボールほどの石がゴロゴロしているので歩きにくいこと、この上もない。日本語が話せるエレーナさんが我々

に随行してくれる。遠藤さんの取材によれば、彼女はお医者さんだそうだ。町の日本語講座で勉強したらしい。

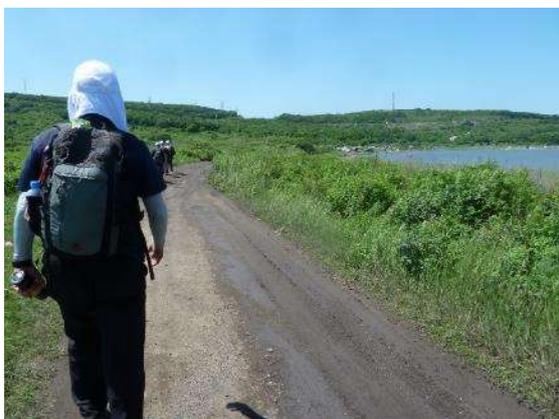


アヤメ？



海岸のゴロゴロ道\_\_

島の中央に切り込んだ入り江を回って進む。湿地帯で歩きにくい、水たまりに木の渡しが置かれている。主催者の気遣いと努力が垣間見える。高台へ上がると、エレーナさんの娘さんが飼い犬と一緒に駆け寄ってくる。エレーナさんは離婚している。しかし、彼とは良い友達になったと明るく自己紹介する。北欧系の人々は、女性が職業をもち自立する生き方に特徴があるように思う。



入り江は遠浅で裸足の子供たちが遊んでいる。



エレーナさん母子。左は中村さん、原武さん。

16時頃、ようやく水族館のある公園へゴールする。すでに14kmコースを歩いたグループが先にゴールし、出迎えてくれる。塩沢さんやウラジミールさんの顔もあり、うれしい。早速、完歩証を渡された。その地点を所持のGPSでみると、北緯43°00.925'、東経131°55.904'だった。緯度は札幌市に、経度は島根県益田市あるいは山口県光市に近い。



水族館の入り口を背後へ回り込む。



ゴール！疲れた。

アルセニエフ市を含めて子供たちや若い人の姿が目立ったのは、ロシアでは6月から夏休みで、新学期は9月だからのせいだ。また、平均寿命（したがって平均年齢）も日本に比べてずっと若い（2016年で男性66.5歳、女性77歳、平均72歳、革命前より2倍に伸びたという。Wikipediaより）。

帰国して、アレクセイ・ユルチャク著「最後のソ連世代」（半谷史郎訳、みすず書房、2017）を読んだ。ロマンさんが「ロシアではゴルバチョフの人気はない。ブレジネフ時代の方が良かったとさえ思う」と話したからだ。その本によれば、西側で流布された西側的価値観に基づく体制 vs 反体制、自由の抑圧 vs 抵抗という二項対立モデルは間違っているという。結局、大部分の人々は、自分で体験していない事柄には、思い込みで作ったイメージをもち、公正なはずのメディアも一体となって助長している。そうしないと大衆が買わないからだ。SNSが拡大してもこの本質は変わらないかもしれない。大衆社会の弱点といえる。



7月8日早朝のホテル前の通り。スーパーがある。



ウラジオストク空港への途中、日本人慰霊碑へ参詣。

—2019年9月24日記す、12月24日最終稿—